

第4回 ESD 構成主義研究会 概要報告

◇開催日時 平成29年6月16日(金)19時~21時

◇会場 中澤研究室

◇参加者 河野、新宮、島、中澤

◇内容

『状況に埋め込まれた知識』「ウィリアム・F・ハンクスの序文」



・学習の場は知識の獲得の場ではなく、社会的共同参加の場にある。社会的共同参加の中でも、学習したくなる適切な文脈を提供することが重要だ。

狭義：導入が重要だ

広義：学習の場そのものを再検討する必要がある。

・正統的周辺参加（実際に仕事の過程に従事することによって）によって、業務を遂行する知識・技能を獲得していく。

・教え方より子どもの学び方を研究すべき。

・古典的主知主義では学習は個人の頭の中にあった。そうではなく、共同参加者の間で異なった見え方の違いによって学習が媒介される。対話の中に学習が成立する。学びの集団のありかたを追究することが大事だ。

・普遍的な構造ではなく、柔軟な構造。学習の過程で、ある程度構造は再構築されるもの。

・学習というものは、人々がLPPの条件の下に相互に関わりあうときは、いつでも生起するもの。

・途中で抜ける場合、転用（ポータブル）できるかどうか

学び方（参加のスキーマ）を学んでいるから獲得した実践のやり方に含まれる予見する力・直観力などが転用できる。

・LPPには、関与する能力・学ぶ力も同時に獲得されると考えられる。

・効果的なLPPとは、共同でその業務に関わり合える。参加の仕方をうまく仕分けてあげられるか
→ うまくとは具体的にはどういうことか。

・言語の役割 実演と説明

それを二項対立としてみなすのではなく、言語使用は、多重的参加技能を含意している。（言語は世界で行為するための一手段）言語使用も、獲得する技能などのひとつ。

・LPPというものは、行為者が関与する役割構成を指しているのか、それとも関与するやり方を指しているのか。

LPPは関与のやり方を指している。徒弟は、業務に集中しているだけでなく、親方のやっていることにも注目している。ここに、学びのポイントがある。

・学習とは、社会的世界でのあり方であって、それについて知るようになるやり方ではない。

知識の獲得を主目的としたものではない、社会参加・一人前という存在になることを目的としたもの。

・適切な関わり合いとは、①共同体の中での人間関係における関わり合い、②社会との関わり合い。

